



京都市文化観光資源保護財団

会報

No. 30



もくじ

- シリーズまもる③⑩ 二条城障壁画の模写(2) 川面 稜 一 P 4
京都の文化的伝統とこれからのまちづくり(5) 京都大学教授 西川 幸治 P 6
会員だより P 7
「文化財紹介」 京都ハリストス正教会聖堂 P 8
古い寺に住んで (7) 林丘寺門跡住職 成瀬 恵新 P 9
郷土芸能の夕とわらべうた あいりす音楽院院長 高橋美智子 P 10
保護財団の活動 P 11

日本画家

会報題字 理事長 佐伯 勇

会 報	
No. 30	56. 10. 1
編集・発行 財団 京都市文化観光資源保護財団 法人 京都市左京区岡崎最勝寺町京都会館内 〒606 電話 075-752-0235 (代)	

募金にご協力いただき
ありがとうございました

寄付者芳名録(敬称略) 56. 3. 1~56. 6. 13

—法人及び団体の部—

〔特別会員〕

※財団法人 不審庵 〈340万円〉

〔普通会員〕

※株式会社じゅらく工芸織 〈40万円〉

※山勝織物株式会社 〈20万円〉

菱屋株式会社 〈20万円〉

※織悦株式会社 〈19万円〉

※株式会社西陣まいづる 〈12万円〉

※厚木市立厚木中学校 〈11万6千2百3拾5円〉

※厚木市立睦合中学校 〈11万4千6百拾2円〉

※泰生織物株式会社 〈11万円〉

※株式会社 田鶴 〈10万5千円〉

〔賛助員〕

※株式会社 曾根商店 〈5万8千円〉

※厚木市立林中学校 〈4万2千9百3拾5円〉

※丸重株式会社 〈3万円〉

※株式会社 京都相互銀行秘書課 〈3万円〉

※ふじや 〈2万5千円〉

※株式会社 富士銀行 京都支店 〈2万円〉

※株式会社 加納幸織物 〈1万5千円〉

—社寺の部—

〔特別会員〕

※醍醐寺 〈450万円〉

—個人の部—

〔特別会員〕

山 本 皓 一 〈100万円〉

※高 橋 政 幸 〈20万円〉

※竹 村 實 〈13万5千円〉

※梅 岡 大 祐 〈10万3千円〉

〔普通会員〕

※山 崎 章 〈9万円〉

※丸 山 末 棹 〈8万2千7百円〉

※山 崎 き ぬ 〈8万円〉

※水 口 英 子 〈6万5千円〉

※伊 藤 ナツエ 〈6万1千円〉

※天 野 和 夫 〈6万円〉

※三 原 慶三郎 〈6万円〉

※竹 内 キミ子 〈5万円〉

※高 橋 一 男 〈4万9千円〉

※児 玉 誠 〈4万6千円〉

※岡 本 保 止 〈4万5千9百9拾9円〉

※村 田 陶 苑 〈4万5千円〉

※原 山 喜 代 〈4万円〉

※加 藤 雅 一 〈3万4千円〉

※上 田 長 雄 〈3万2千円〉

※大 隅 シゲ子 〈3万円〉

松 田 禪 格 〈3万円〉

※吉 田 篤 信 〈2万8千円〉

※奥 崎 一 郎 〈2万6千円〉

※今 井 憲 一 〈2万5千円〉

※上 田 智恵宗 〈2万5千円〉

奥 田 敏 一 〈2万円〉

〔賛助員〕

※田 村 芳 子 〈1万8千円〉

※元 吉 正 文 〈1万8千円〉

※松 本 善次郎 〈1万7千円〉

※鈴 木 光 子 〈1万6千2百円〉

※アオイ自動車従業員一同 〈1万4千6百5拾2円〉

※西 原 寿 子 〈1万2千円〉

※関 崎 みのり 〈1万1千3百円〉

※大 野 健 三 〈1万1千円〉

※駒 井 桂之助 〈1万1千円〉

※奥 田 芳 男 〈1万円〉

今 井 雅 治 〈1万円〉

岩 佐 静 子 〈1万円〉

都 築 敬 次 〈1万円〉

三 木 健 次 〈1万円〉

前 田 敏 男 〈1万円〉

※西 井 貞 子 〈9千5百円〉

※久 保 馨 〈9千円〉

※島 田 義 夫 〈9千円〉

※奥 村 賢 三 〈8千円〉

※高 広 康 子 〈8千円〉

※吉 井 明 子 〈8千円〉

※平 野 和 彦 〈7千5百円〉

※大 隅 禮 〈7千円〉

※種 山 光 世 〈7千円〉

※盛 田 准 子 〈7千円〉

※作 道 鋭 一 〈6千円〉

※安 田 孝 夫 〈6千円〉

※野 阪 喜一郎 〈5千3百円〉

※遠 藤 伊之助 〈5千円〉

神 崎 順 一 〈5千円〉

馬 場 忠 夫 〈5千円〉

舟 木 八重子 〈5千円〉

※森 田 俊 子 〈5千円〉

※宇 野 美 子 〈4千円〉

※入 山 博 行 〈3千円〉

※西 岡 敏 郎 〈3千円〉

※吉 田 敦 子 〈3千円〉

※山 田 道 雄 〈3千円〉

※西 村 孝 一 〈2千5百円〉

土 村 清 治 〈2千円〉

寺 嶋 瑛 〈2千円〉

※都 築 元 昭 〈2千円〉

※中 山 茂千代 〈2千円〉

※林 寛 子 〈2千円〉

米 沢 富 三 〈2千円〉

秀 熊 昭 〈1千5百円〉

小 島 和 久 〈1千円〉

川 村 三 郎 〈1千円〉

山 口 啓 次 〈1千円〉

(※印は追加寄付の篤志者、寄付金額は累計額)

ごあいさつ

財団法人 京都市文化観光資源保護財団 会長

京都市長

今川正彦



このたびの当財団会長就任にあたり一言ご挨拶申し上げます。

京都は、平安京建都以来、約1200年の長い歴史の中で、それぞれの時代を象徴する数多くの文化遺産を生み、育ててきました。

そして、これらの文化遺産は、豊かな自然と一体となって京都の魅力を形づくり、国の内外からその価値を極めて高く評価されております。

このような文化遺産の保存と継承を目的とする当財団も、設立以来、京都市民をはじめ全国各界からのあたたかいご支援ご協力を得て、保護事業の成果が年々充実してきておりますことは、このたび会長に就任いたしましたわたくしにとりまして誠に心強いかぎりでございます。

しかしながら、年々社会、経済情勢の変化により、これらの文化遺産の保存を図っていくことは、むづかしい状況にあり、文化財の保護や伝統行事の継承は、困難の度を加えつつあります。

京都市といたしましては、こうした状況の中でこれら文化遺産の保護施策の充実に努めておりますが、なにぶんにもきびしい財政事情等により容易なことではなく、当財団の果たす役割がますます重要なものとなってきています。

このような折、当財団が新たに基金5億円を目標に全国的な募金活動をくりひろげ、保護事業の充実を図ることになりましたことは、時宜を得たものであり、その期待も大きいものがあります。

わたくしは、9月市会定例会において文化財保護条例案を提案し、その制定を図って、さらに文化遺産の保護施策を充実強化するとともに、当財団会長といたしましても新たな基金拡充の目標の達成と当財団発展のために努力いたす覚悟でございます。

皆様方におかれましても、なお一層当財団への積極的なご支援、ご声援を賜われますようお願い申し上げます、会長就任にあたってのご挨拶とさせていただきます。

二条城障壁画の模写 (2)

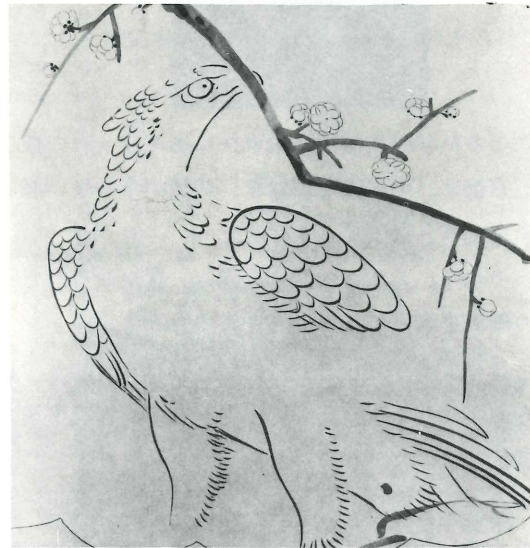
日本画家 川 面 稜 一

二条城の二の丸御殿の障壁画の模写も昭和47年から始まって今年で9年目になります。

襖1枚を何か月かにらみつづけていると、いろいろな事を見つけて喜んでいます。

近頃、めずらしい事を見つけたのは、黒書院牡丹の間の東側の戸襖の紅梅図の金箔の下から上の紅梅図に全然関係のない鳥の顔らしきものが出てきたことです。よくよく見ると、するどい目つきの鷹であります。初めは何かよくわからなかったが、岩石の上にとまって頸を廻して斜め上の上空をにらんでいる姿であります。素描風の筆つきで、生き生きと躍動している眼のするどさは人を引きつけるものがあり、姿全体も、とまっている岩の皴もよく書けており、よほどの能筆の画家であった事がわかります。

金碧画の仕上げのくくりの線は、ふつう硬い線が多いのですが、下図の線は描こうとする気持ちが大きく働いて全く躍動した線になるのが常であります。本紙の制作よりも草稿の方が良いというのは、そういう事であろうと思います。その鷹が、大広間の探幽筆のあの勇大な松に鷹の図の左端の襖の鷹と同じ姿である事に気付いたので、模写の為にフィルムに写しているものを襖の上にあてて見たところ、周囲3センチほど一回り大きいのが全く同じであることがわかりました。とまっている岩の形も同じです。襖の大きさも殆ど同じなので、画家が襖を間違えて骨書きをしたその段階でだれかが気付いて「お師匠さん間違っています」という一幕があった



紅梅図の金箔の下から出てきた鷹の骨書き。狩野探幽が襖を間違えて書いたものと推測され、その当時の様子が思い浮ばれる。

事と思います。紙を張り替えるのも勿体ない、或は時間がなかった、上から金箔をおいた雲形にしたら見えないから、そのまま再利用したものと考えられます。探幽の骨書きは、白描と認めてよいと思います。

探幽さんといえば神様のように思っているが、間違える事もあったのかと画家一同ひそかに面白く思うと共に私達もこのようなことを見習わないように、間違わないようにいましめています。

それからもう一つ、牡丹の間北側の2面の大貼付の牡丹の花色の事です。牡丹の花の絵具が、剥落した下から花の色調を指示するらしい墨書が花の骨描の間からチラチラと見えました。白、うすいろえんじのえのぐと三通りです。朱の花は、剥落せず顔料がそのままに残っている

のでその下に字があるかどうか分からない。えんじの判読には苦勞しました。えんじ（燕脂）のぐ（胡粉）の事で、絵具或は、すき焼のぐのたぐいです。貼付壁だけに赤色指示の墨書があるのを色々と想像して見たのですが、貼付は大きいからお師匠さんの指図の出きない他の場所

で描いた為だろうと思います。二条城二の丸御殿だけで1,013枚の襖絵を短時日で完成さすには、狩野派の大番頭の興以を筆頭に探幽、尚信、安信の三兄弟をひきたてて制作したようですがよく出来たものです。門弟が何人いたか、一族何十人も参加した事と思われます。それで牡丹も尚信が小下図を作り、骨書きだけをして花の中に色名を指示しておき、葉の岩緑青を塗る人、花を描く人と分業的な工程で仕事を進めたと思われます。

桃山時代、江戸初期は、全国の城、寺院の要望にこたえて、京狩野、江戸狩野と別れそれぞれの需要にこたえ工房生産で分業になるのは当

然です。

牡丹の間を模写中に、一時期前の大覚寺の牡丹の間を見学に行き、その見事な風格には感心しました。然して花色は案外単純であったと思います。妙心寺の海北友松の牡丹の屏風は、花色が非常に多いです。

養源院の襖の折枝画の牡丹の図は、二条城と同じ尚信系統で保存もよく可愛い作品であり、花の仕上げも二条城とよく似ており大変参考になりました。珍しいのは、黄色の花があった事です。胡粉で仕上げておいて、雌黄と具のうす汁をうすく塗って黄緑で中ボカシをしたと思われる。

良い模写をするには、模写をする現物を深く追求することは勿論ですが、またその同時代の作品をよく見ることと、その時代の前は、どうであったか。それが、次の時代にどう変わっていくかをよく研究することです。

(了)



黒書院 牡丹の間北側の障壁画

絵具が剥落した下から出てきた花の色調を指示する文字。この箇所には「白」と書かれてあった。



写真提供：京都市埋蔵文化財研究所

これから21世紀に向かって京都にどのようなまちづくりをしていけばよいのか。京都は、きわめて多様な文化の伝統をもつ地域からなりたっている。それをあらためて見なおす必要がある。

たとえば、京都が史跡として誇る堀川を荒廃したかたちでおいておくのはなぜかわしいことである。なんとか再生させ、うるおいのある史跡の河川公園として復活させ、文化のかおり高い街路としたいと願うことも一つであり、山科寺内町の史跡をもっと山科のまちづくりの中に生かすことが出来ないものか。あるいは、桂離宮は洛西の自然環境の中にあればこそ意味があり宅地開発の波の中でおわれてしまったならば桂離宮の価値は半減する。それぞれの地域にそれぞれの文化財が丹念にまもり積極的に活用していく必要があり、同時に現在と将来に生きる京都の市民が生き生きとした生きがいをおこすまちとするために、たえず、その伝統を更新しなければならない。

そのために、都市博物館の建設を提案したいと思う。

都市には京都に限らずどんな小さな町や村にもそれぞれの地域の文化的な伝統というものがある。そこに生活した人々は、その環境を守り向上させ文化をうみだすために懸命な努力をつづけてきた。そのような過去の伝統を正しく再評価し、これからの都市のすすむ方向を見きわめるために都市博物館をつくるべきではないか。従来の博物館のように、たんに過去の遺産を展示するだけでなく、都市の伝統を再評価し、都市の現状を把握し、そして将来の都市を市民が互いに真剣に考え、語り合えるような将来の構想を提示し、討論できる場として、どのまちにも都市博物館が必要となってきた。

「地方の時代」といわれる今日、最も必須な一つの施設ではないかと思われる。そして、京都こそ、この都市博物館の建設に先導的役割をはたすべき都市であり、京都に各地の都市博物館を結びつける中央都市博物館をつくり、新しい都市文化を開発する為の研究所をつくることは京都にもっともふさわしく、また京都はそういう状況をととのえていると思われるのである。

こうした作業と努力をつづける中で、京都にあるすぐれた伝統文化をうけつぎ再生させ、新しい文化を創造させなければならない。

伝統文化の正しい継承と新しい文化の創造をつちかうなかでこそ新しい地方文化の創造に努めている各地の都市の人々から京都が、文化的な中枢としていつまでもあこがれをもたれ、尊敬されるようなところとなっていくのではないかと思う。

(了)

(財団設立10周年記念 文化講演会における講演録)

会員だより 桂離宮で 憶ったこと



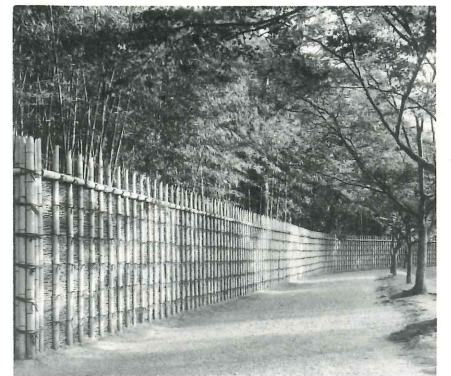
松尾大社 前宮司 犬上英直

京都に住んで14年余り、近くにしながら桂離宮を参観する機会に恵まれず、残念に思っておりましたが、先日ようやくその望みがかなえられ、知己数人と出かけました。

20人ぐらいの参観者が、待ち合わせていましたが、他の観光地のような喧噪けんそうはなく、人声はするがそれが返って静けさを呼ぶようにも思われ、はじめから落ち着いたすがすがしい雰囲気に入ることができました。

桂離宮の面積は、5万6千㎡じんがいだそうですが、文字どおり塵外じんがいの境であり、短い時間でしたが洗練された書院・茶室などの結構や匂いたつような庭園美をあますことなく、堪能させてもらいました。

伝統文化の粹に、接することの幸せとは裏腹



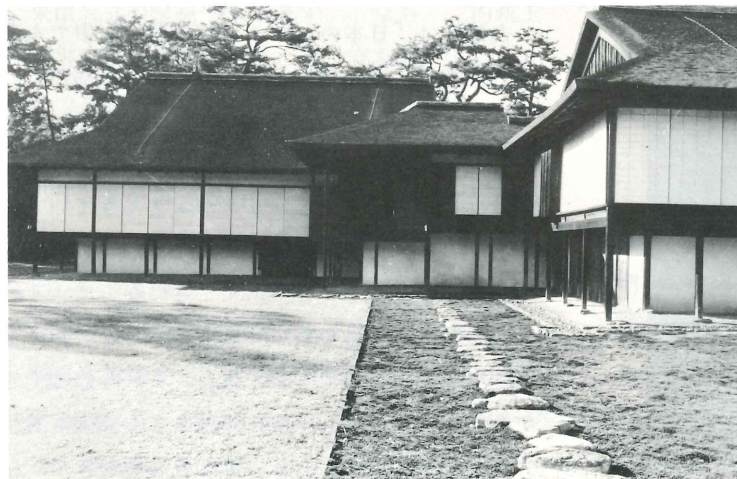
桂離宮 桂垣

に物で榮えて心で亡びるといわれる、いまの世の人の心の営みやうら枯れて瑞々みずみずしさを失いがちな人の心のいきつくさき、先人が苦勞してのこしてくれた文化遺産の重みについての感じとり方などさて、どうだろうかと、思い煩いながらもその一方では、明と暗、新と旧、動と静、いつの時代も、ことごとくに複雑な世相を描きながらもそのなかから貴重な文化財を生み育て千年の歴史を榮えてきた京都、何もかも包みこんで今日からは、また新しい次の世代にむけて困難はあっても時代の流れにつれて、とりどりにすば

らしい花を咲かせながら歩みつづけるだろう京都。

竹垣のうちから外を垣間見て、胸をよぎったひとこまですが、人並みに心配をしたり望みをかけたり、とりとめもない偶感ですがこれも離宮参観の余韻がなせるわざというべきでしょうか。

明暮、離宮のお世話をなさる皆さんに感謝して帰路につきました。



書 院

「文化財紹介」

京都ハリストス正教会聖堂

たくさんの古い社寺建築や伝統的な町家が京都らしいたたずまいをのこす市街地では明治の貴重な建物が近年、改築等によりその姿を消していく傾向にあります。それらの中にあって、明治の木造建物としてよく保存され、文化財としても価値が高く昭和46年度並びに53年度に修理が行われ、当財団の補助対象にもなった京都ハリストス正教会聖堂をご紹介します。

京都ハリストス正教会は、キリスト教諸宗派のうちギリシャ正教の日本ハリストス正教会に属し、ロシア人ニコライ大師父によって開設されたものです。

聖堂は、明治36年、京都府庁舎の設計工事を担当し、当時の京都における代表的建築家である松室重光氏の設計によるもので、ニコライ氏



市内の中心 中京区柳馬場二条にある
京都ハリストス正教会



見る者に崇高の念を抱かせる聖障(イクノスタス)そこに描かれている聖像は芸術的にもすぐれた素晴らしいものである。

の本国ロシアの聖堂と同じビザンチン様式をとっています。建物は西面を玄関にし、外観は異国情緒をもつ木造3階建の鐘塔と大きく低い木造1階建の聖堂からなっています。そして聖堂内部は啓蒙所、聖所、至聖所があり、聖所と至聖所は、聖障(イクノスタス)によって仕切られています。聖障にはロシアで描かれ芸術的にもすぐれている聖母像や受胎告知像など多くの貴重な聖像が掲げられ、荘厳さをかもしだしています。

現在、当聖堂の保存に努められている日比義夫神父は「日本のハリストス正教会の中で木造の聖堂は、現在数えるほどしかなく京都のこの聖堂ほどりっぱなものはありません。聖障も他には非類のないほど非常にりっぱなもので、最近見せて欲しいという人がふえてきています。しかし、いたみがはげしいのです。終戦のまぎわにこの聖堂をとりつぶすことになって、その時聖画のとりあつかいに無理があったのがそもそもの原因なのですが、現在、これを修理できる人もいませんし、仮に修理しても莫大な費用がかかることもあって、とても心配なのです」とその保存にご苦労されています。



当寺は、今を去るおよそ250年の昔、第108代後水尾天皇の第6皇女緋宮光子内親王を開基の宮と仰ぎ御本尊は、父帝の守り本尊として京都御所に奉安の聖観音像を特に下賜せられたものであります。光子内親王は、四明山下のこの一仙境で爾来、ご信仰を通じて一生を仏画をえがき仏体を刻して明け暮れ、さながら観音変化の日々かと伺われるくらしで、ちょうど、47年間、ご在職になり94才のご高齢をもって享保12年10月6日に薨去されました。

第2世、普光院の宮は、靈元天皇の皇女であり、第3世、普門院の宮は桃園天皇の御猶子、東山天皇の皇孫であります。しばらく、内親王様方の御入室があったため、音羽御所又は林丘寺の宮と称せられていました。

明治初年、寺門改革によって門跡の称号を賜わり、そして、明治17年に現在の修学院中離宮を宮内庁に奉還して、残る1800坪が、現在の境内になっております。

その後、数度の修理にもご下賜金があり又、別に永続賜金として年金を賜わるなど実に皇室の庇護に負うところは大きであったのですがやがて、終戦後の大変革にともない寺門の維持にも事を欠く有様となり、久しく修理の出来ないま

ま建物も次第に荒廃その極に達したのであります。このため一時は、雨漏りがひどいこともあって如何にして梅雨期を越えんものと心痛した事もありましたが幸い同友の士が、相はかり寺を護るべく会を組織していただき、それに保護財団より貴重な補助金を頂いて山門を初め年々、部分的修理を続けてきましたが、なにぶんにも老朽化した建物修理は容易ではなかったものであります。

時代の変遷と共に人々の最も憧憬する静寂と自然に恵まれたこの佳境の地、開山の宮様が残された絵画や仏像などの什宝には深い信仰と徳義の高さが伺われます。法燈を受けつぐ私達にはご本尊の観音様や開山の宮様のご加護とご支持を頂いている事が痛切に感じられ、世人に知られない貴重な文化財としてまもるためには不滅なる靈魂に対しての愛情と信仰であり、信者の協力と寺門の無駄なき日常生活によって堅実にゆっくりとあせらずに修理をしていくことが文化財をまもるために万全を期する事が出来ることを信じ遠き道ながら歩みを進めています。

現在、開山堂の屋根葺替修理にあたっていますが、それも何年前より信者とともに計画し、今年こそはと予定しながらも物価騰貴によってままならず年々見過し、今回やっと修理することになりました。おかげさまで、保護財団よりご援助を頂く予定となり、誠に嬉しく感謝の窮みながらも修理完成時の支払いを思う時、一抹の不安を感じずにはおられません。しかし、観音様や開山の宮様の御加護を信じ、先人より残されたかけがえない尊い什宝を信者と共につつがなく後世に残す事こそ私達の使命であると日々痛感し祈念しております。

郷土芸能の夕と わらべうた



あいりす音楽院
院長 高橋美智子

「郷土芸能の夕」と「京のわらべうた」は、大へんご縁の深い間柄です。そのおつきあいは、昭和45年10月7日、京都会館第1ホールで、京都会館10周年並びに文化財保護法施行20周年記念事業の一つとして

「郷土芸能の夕」が開催され、あいりす児童合唱団の子どもたちによって紹介されたときから始まりました。

そのおりのプログラムをひらいてみると、当時、京都市長職務代理者、京都

市助役でおられた船橋前京都市長が、「……京のわらべ唄を織り込むなど、構成、演出にも工夫をこらし楽しいものにいたしました……」と、ごあいさつの中で述べておられます。もう、これもひとむかし前のことになりました。

京のわらべうたは、「郷土芸能の夕」と共に歩んできた、というより、この催しがあったから、生き残ることができたという方があっています。もちろん、わらべうたは、もともと舞台でみる芸能ではありません。しかし、生活様式の急激な変化で、京都らしい静かな町並みと一しよに姿を消そうとしていた京のわらべうたをこのステージで紹介したことから、みなさんに

思い出していただくことができました。そして、心のふるさととして見直されたわらべうたは、昨今では、小学生の音楽の教科書に採り上げられ、また、テレビやラジオのCMソングにまで

うたわれるようになりました。

わたしは幼いとき、わらべうたで育ちました。わたしの生れた三条高倉のあたりは、レンガや石造りの洋館と大きな商店がならぶ町でした。

そんな賑やかなところでも、町内のかど

— 昨年の郷土芸能の夕より —

はわたしたち子どもの遊び場で、道巾一ぱいに長くなったりまるくなったりして遊んでいました。大急ぎで宿題をすませてきた者も仲間に入って、いつもの顔ぶれが揃い、遊びが最高潮に達するころになると、意地悪く、きまったように家々から「ばんご飯え」と呼びに来ました。「おもしろい最中やのになア」と、心を残しながらいやいや帰るのがいつものことでした。

わたしはわらべうたにふれるたびに、こうした幼な友だちや遊びのひとつが、昨日のことのようによみがえってきます。そして、子どもらしいわらべ時代を過すことができた自分は、幸せであったと思います。



幼ない子供たちがうたってくれるむかしなつかしい京のわらべうた。それは、京の心を私達に伝えてくれる。

千年の都であり、日本の文化のふるさとといわれる京につたわったわらべうたは、大せつな日本の心のふるさとです。わたしはこれからも「郷土芸能の夕」のステージから、みなさんに心のふるさとを、おくりしたいとねがっております。

保護財団の活動

— 京都の多彩な芸能を紹介する —

第12回 郷土芸能の夕開催

京都には、古くから伝わる郷土芸能が数多く残されています。今回は、落語、講談、浪花節など話芸の源流といわれる節談説教、や左京区静海市原町に伝わる素朴なハモハ踊りなど一般によく知られていない芸能に京の代表的な民俗芸能である六斎念仏踊、やすらい踊、それになつかしい京のわらべうたを折りこんで皆様にご紹介いたします。

- ☆ 日 時 10月24日(土) 午後6時30分開演
- ☆ 場 所 京都会館 第2ホール
- ☆ 主 催 京都市・京都市文化観光資源保護財団
- ☆ 出 演 鞍馬竹伐り会・節談説教・上賀茂やすらい踊・御神楽・梅津六斎念仏踊・ハモハ踊・京のわらべうた
- ☆ 司 会 露乃五郎(落語家)
- ☆ 構成・演出 権藤芳一(京都観世会事務局長)
- ☆ 入 場 料 当日券1,200円
前売券 900円
団体券 800円
(15人以上)

京都市内各プレイガイドで発売

郷土芸能の夕
会員割引券
¥800

京都市文化
観光資源保護財団

※本催の入場料を当財団会員1名につき2枚を限度に優遇させていただきます。ついては、郷土芸能の夕会員割引券を切りとり当日、入場券売場へご提出下さい。

お問い合わせは当財団事務局へ



京の代表的伝統行事、鞍馬竹伐り会。初めて舞台から皆様にご覧いただきます。

第30回文化財特別参観のご案内

— 清水寺本坊“成就院”と“法観寺” —

今回は、東山の産寧坂、二年坂の古いまち並みを訪ねるとともに静寂で美しい庭園のある未公開の“成就院”と八坂の塔として親しまれている“法観寺五重塔”の参観をおこないます。

- ◇参観日時 昭和56年11月28日(土)
午後2時(参観時間約2時間)
- ◇対 象 者 財団募金協力者(会員)とその家族
- ◇申込方法 住所・氏名・年令を記入し、返信用切手60円分を同封の上、封書によりお申込下さい。
- ◇申 込 先 〒606 京都市左京区岡崎最勝寺町 京都会館内
京都市文化観光資源保護財団
- ◇参加費不用

※お問い合わせは財団事務局まで。なお、参加ご希望が多い場合制限することがあります。

1982年 文化財カレンダーのお知らせ

伝記や物語をえがいたすぐれた絵巻物の中から、国宝・重文に指定されている代表的な作品で京都にかかわるものを6点選び、作成いたしました。ご希望の方は本財団事務局までお申込み下さい。

□テーマ 「京の絵巻物」

□内容

紙本墨画 国宝 鳥獣人物戯画 蔵 高山寺
紙本著色 〃 北野天神縁起 〃 北野天満宮
〃 〃 一遍上人絵伝 〃 歓喜光寺
〃 〃 法然上人絵伝 〃 知恩院
〃 重文 融通念仏縁起 〃 清涼寺
〃 〃 弘法大師行状絵詞 〃 教王護国寺

□申込み方法 往復はがきに文化財カレンダーの申込み・住所・氏名（法人の場合は法人名と代表者名）を記入のうえ11月20日までに当財団事務局までお申込み下さい。申込み先着 100名の方に無料（ただし、郵送料必要）で頒布いたします。申込者については返信用はがきにより追って通知します。なお、申込み資格は当財団会員に限りです。（1人につき1部）

○未公開寺院特別拝観

11月1日～8日 午前9時～午後4時

対象寺院：黄梅院・徳禅寺・聚光院・興臨院・法然院・靈鑑寺・光雲寺・天授庵・建仁寺開山堂・久昌院・成就院・妙法院・高台寺

（聚光院4日まで、黄梅院・興臨院5日まで）

拝観料 1ヵ寺 500円

主催 京都古文化保存協会

（お問い合わせ075-561-1795）

○京都市埋蔵文化財研究所設立5周年記念

*「講演と映画の夕べ」—入場無料—

11月20日午後6時於：京都市社会教育総合センター4階ホール

講演「埋蔵文化財保護の現状と課題」

玉利 勲氏（朝日新聞編集委員）

映画「大枝山古墳群」

*埋蔵文化財写真展

I. テーマ「京都の古墳」—入場無料—

11月16日～11月20日於：京都市社会教育総合センター1階ロビー

II. テーマ「5年間の発掘成果集」—入場無料—

11月17日～12月16日 於：京都市埋蔵文化財調査センター3階

お問い合わせは研究所（電話075-415-0521）まで

○京都市考古資料館

同資料館「新発見コーナー」の展示替え

11月17日～ お問い合わせは資料館（電話075-432-3245）まで

編集後記

■当財団の文化財専門委員であり、会報で「日本庭園の移り変り」などの解説をいただきました京都大学名誉教授関口鏐太郎先生が去る7月21日ご逝去されました。ここに謹んで故人のご冥福をお祈り申し上げます。

■去る9月1日から5日に行なわれた二条城清涼園特別公開において、京都の文化財を守る募金の受付をおこなったところ、およそ300名もの京都市民や観光客の方々などからたくさんのご寄付をいただきました。事務局では、京都の文化財を愛し、親しみを感じておられるこのような方々のご協力にこたえるために、今後一層頑張ろうとはりきっております。皆様のご声援をお願いいたします。

表紙写真解説

■聖護院宸殿襖絵

襖絵は、門跡寺院で修験宗の総本山でもある、聖護院の宸殿にあり、江戸初期狩野益信によってえがかれたと伝えられる。

なお、当襖絵は昭和54年度に破損著しいため修理がおこなわれ、当財団の補助対象になったものである。

